

學術論文集

Bulletin of the Korean Scholarship Foundation

第 28 集

2011

財団法人 朝鮮獎学会
The Korean Scholarship Foundation

特別寄稿

チアチア語のハングル表記体系について

東京外国語大学大学院（朝鮮語学）

趙 義 成

要 旨

現在インドネシア共和国ブトン島南部を中心に話されているチアチア語を表記する文字として、2009年にハングルが採用された。ハングルによるチアチア語の表記法は、大韓民国に本部を置く訓民正音学会が中心となって作られたものである。本稿は、訓民正音学会が作成したハングルによるこのチアチア語表記法を言語学的に分析し、その問題点を検討するものである。

0. はじめに

本稿の目的は、大韓民国（以下「韓国」）に本部を置く訓民正音学会が中心となって作ったハングルによるチアチア語の表記法について、言語学的な観点から分析し、その問題点などを検討することにある。ハングルとは本来、朝鮮語を表記するための文字であり、その文字が朝鮮語以外の言語を表記する文字として採用されたとして話題となった。本稿ではまず、ハンゲルの文字体系、およびチアチア語の音韻体系を概観した後、ハングルによるチアチア語の表記法を分析し、その表記法の何が問題であるのかを言語学的に論ずる。

1. ハンゲルの文字体系

ハングルは韓国では「한글 hangul」⁽²⁾ [hangul]（「大いなる文字」の意）と、また朝鮮民主主義人民共和国（以下「共和国」）では「조선글자 josengurja」 [tɕosɔngultɕ'a]（「朝鮮文字」の意）と呼ばれている文字で、元々は朝鮮語を表記する文字として作られた。朝鮮半島では元来、自民族の言語を表記する

※ 論者は現在、東京外国語大学大学院准教授の職にある。

(1) 本稿では民族全般に関連するものは「朝鮮」の語を用いることにする。したがって、この地域で使用される言語は「朝鮮語」と称することにする。

(2) ハンゲルの直後のアルファベットは、ハンゲルを翻字したものである。翻字については、【表1】、【表2】および脚注(6)を参照。

独自の文字を持たず、知識層の書記手段はもっぱら漢字に頼っていた。そのような中、李氏朝鮮王朝第4代国王である世宗（在位1418-1450年）は朝鮮語を表記する文字の必要性を感じて民族文字の創製に取りかかり、1443年陰暦12月に完成させ、1446年陰暦9月に書籍『訓民正音』⁽³⁾として世に広めた。この文字は、当初は訓民正音あるいは諺文⁽⁴⁾と称された。⁽⁵⁾

ハングルは子音字母と母音字母とから成る。現代朝鮮語に用いられる子音字母、母音字母の一覧表は以下のとおりである。

【表1】現代朝鮮語の表記に用いられる子音字母⁽⁶⁾

| | | 唇音 | 歯音 | | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 声門音 |
|--------------|----|----------|----------|----------|-----------|----------|---------|
| 破裂音 / 破擦音 | 平音 | ㅂ b /b/ | ㄷ d /d/ | ㅅ s /s/ | ㅈ j /j/ | ㄱ g /g/ | ㅎ h /h/ |
| | 激音 | ㅃ p /p/ | ㅌ t /t/ | | ㅊ c /c/ | ㅋ k /k/ | |
| | 濃音 | ㅍ bb /β/ | ㄸ dd /δ/ | ㅆ ss /σ/ | ㅈㄱ jj /ç/ | ㄲ gg /γ/ | |
| 鼻音 | | ㅁ m /m/ | ㄴ n /n/ | | | ㅇ /ŋ/ | |
| 流音 | | | ㄹ r /r/ | | | | |

【表2】現代朝鮮語の表記に用いられる母音字母

| | | | | | | |
|---------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 基本字母1 | ㅏ a /a/ | ㅑ e /ɛ/ | ㅓ o /o/ | ㅕ u /u/ | ㅜ u /u/ | ㅣ i /i/ |
| 基本字母2 | ㅑ ya /ya/ | ㅓ ye /yɛ/ | ㅕ yo /yo/ | ㅗ yu /yu/ | | |
| 2字合成字母1 | ㅑ ai /ɛ/ | ㅓ ei /e/ | ㅕ oi /ö/ | ㅗ ui /ü/ | ㅜ ui /ui/ | |
| 2字合成字母2 | ㅑ yai /yɛ/ | ㅓ yei /ye/ | | | | |
| 2字合成字母3 | ㅑ oa /wa/ | ㅓ ue /wɛ/ | | | | |
| 3字合成字母 | ㅑ oai /we/ | ㅓ uei /we/ | | | | |

「基本字母1」は単母音を表すもの、「基本字母2」は半母音を伴った単母音を表すもの、「2字合成字母1」は「基本字母1」の後ろに「ㅣ i」を付加した字母、「2字合成字母2」は「基本字母2」の後ろに「ㅣ i」を付加した字母、「2字合成字母3」は「基本字母1」の前に「ㅓ o /ㅕ u」を付加した字母、「3字合成字母」は「基本字母1」の前に「ㅓ o /ㅕ u」を付加し後ろに「ㅣ i」を付加した字母。

母音字母のうち合成字母に関して言うと、文字創製当時である15世紀に合成字母は文字の構成のとおりに、二重母音や三重母音を表すものであった。例えば /ɛ/ 音を表す字母「ㅑ ai」は「ㅏ a」と「ㅣ i」の合成により形づくられている。これは15世紀の発音が文字の構成どおり /ai/ という二重母音だったからである。その後この二重母音 /ai/ は現代語に至る過程で単母音化し /ɛ/ となったが、つづりは従前のままであったため「ㅑ ai」と表記されることとなった。

(3) 共和国ではこれを陽暦に換算し、1444年1月を完成の年月とする。

(4) 世宗が記した本編である『訓民正音』とともに、文臣が記した解説書である『訓民正音解例』が附されていることから、一般に「解例本」と称される。

(5) 「諺」とは俗語の意であり、したがって「諺文」は「俗語を記すための文字」という意味である。この語はハングルを蔑んだ呼称であると紹介されることがあるが、「諺」の語が解例本において通常語彙として用いられていることから分かるように、必ずしも蔑称であるとはいえない。

(6) 表中の文字はハングル、翻字、音素の順に表示した。翻字とはハングルという文字を1対1でアルファベットという文字に置き換えたものである。したがって、翻字されたアルファベットは朝鮮語の実際の音を必ずしも反映していない。例えば「ㅑ ai」は /ɛ/ 音を表す文字であるが、翻字は ai となっている。これは「ㅑ ai」と「ㅣ i」の合成により形づくられているため、ハングルの文字を1対1でアルファベットに対応させて ai としている。以降、// や [] といったカッコ類のないアルファベット表記は、ハングルを翻字したものである。本稿では原則的にハングルの直後に翻字を併せて記すことにする。音素については脚注(7)を参照。

おおまかに言って、ハングルは個々の音素⁽⁷⁾を1つの字母によって表す。例えば、子音 /m/ は字母「로 m」によって表し、母音 /u/ は字母「ㅜ u」によって表す。したがって、ハングルはラテン文字やギリシア文字などと同じく単音文字（アルファベット）の性質を有している。しかしながら、ハングルは字母を組み合わせて音節単位で1文字を構成する音節文字である。よって、/mu/ は単に字母を並べて「로ㅜ」とするのではなく、字母を1文字にまとめて「무」とする。このように、ハングルは音節文字と単音文字の性質を兼ね備えた文字である。

朝鮮語は音節頭の位置の他に、音節末の位置にも子音が立ちうる。朝鮮語学では伝統的に、音節頭子音を「初声」、音節末子音を「終声」と称する。初声に用いられる子音字母と終声に用いられる子音字母は同一のものであるが、終声に用いられる字母は文字の下部（漢字の部首の「あし」に当たる部分）に書かれる。例えば、/ha/ が「하 ha」と表記されるのに対し、/han/ は「한 han」のように表記する。音節末子音である /n/ は子音字母「ㄴ」で表記されるが、このように終声字「ㄴ」は文字の下部に書かれる。⁽⁸⁾

3. チアチア語音韻体系の概要

チアチア語（Cia-Cia Language）はまた南ブトン語（South Buton）とも称され、オーストロネシア語族のムナ・ブトン諸語の1つである。この言語はインドネシア共和国スラウェシ島東南部の沖に浮かぶブトン島の南部（主要都市はバウバウ市）を中心に話されており、近隣の同系言語にブトン語、ウォリオ語、ムナ語、トゥカンブシ語などがある。Lewis, M. P.(Ed.)(1951;2009:444)によれば、話者人口は2005年の統計で約79000人とされている。

3.1. 子音

チアチア語の子音音素の目録は以下のとおりである。

【表 3】 チアチア語の子音音素

| | | 唇音 | 歯音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 声門音 |
|-----------|----|------|------|------|------|-----|
| 破裂音 / 破擦音 | 無声 | /p/ | /t/ | /c/ | /k/ | (ʔ) |
| | 有声 | /b/ | /d/ | /j/ | /g/ | |
| 入破音 | | /β/ | /d̪/ | | | |
| 鼻音 | | /m/ | /n/ | | /ŋ/ | |
| 前鼻音化音 | 無声 | /mp/ | /nt/ | /nc/ | /ŋk/ | |
| | 有声 | /mb/ | /nd/ | | /ŋg/ | |
| 摩擦音 | | | /s/ | | /h/ | |
| 側面音 | | | /l/ | | | |
| ふるえ音 | | | /r/ | | | |
| 半母音 | | /w/ | | /y/ | | |

(7) 個別言語において、その音であると同定される音を「音素」という。言語の物理的な音は「音声」というが、音素と音声は必ずしも同一ではない。例えば、日本語話者にとって現代日本語におけるハ行子音は1種類であると認識される。そのように同定される1種類の子音（この場合はハ行子音）が音素である。しかし、実際にはハ行子音は [h], [ç]（「ヒ」のとき）、[ɸ]（「フ」のとき）という互いに異なる3つの物理的な音が含まれている。それが音声である。音素は一般に//によって表示され、音声は一般に[]によって表示される。

(8) 終声字があたかも文字を下から支えているかのように見えるため、終声字をまた「받침 badcim」[patçʰim]（「支え」の意）とも称する。

以下に特記すべき事項を掲げる。

- (1) 硬口蓋系列の音のうち破裂音 /c/ [tɕ], /j/ [dʒ] および半母音 /y/ [j] は、いずれも元々借用語に現れる音素である。ただし、[tɕ] という音声は /t/ の異音として、狭母音 /i, u/ の前で現れる。
- (2) 前鼻音化音は破裂音（あるいは破裂音）の直前に鼻音を伴った音である。ただし、チアチア話者の中でこの音は「鼻音 + 破裂音（破裂音）」という子音連続と認識されているのではなく、あくまで1つの子音音素として認識されているようである⁽⁹⁾。なお、/nc/ [ʰtɕ] は /nt/ の異音である可能性がある（上記(1)参照）。
- (3) 破裂音のうち有声音 /b/, /d/ は借用語に現れる音素であり、本来のチアチア語における有声音は入破音の /b/, /d/ である。したがって、この言語に固有の無声 - 有聲のペアは唇音では /p/ - /b/, 歯音では /t/ - /d/ である⁽¹⁰⁾。
- (4) /w/ は van den Berg, R. (1991:308) では唇の丸みを伴わず、軽い摩擦を伴った両唇接近音とあるが、이호영 (2009:95) ではこの音素を「有聲唇歯摩擦音 /v/」とし、「しばしば [w] に弱化する」としている。
- (5) 声門音 /ʔ/ は個別の音素として認識されていない可能性がある。この音は以下のような環境において現れる音であるが、細かい点においては不明な点もある：
 - (i) 語頭に母音が立つ場合。例：/ʔisa/ 「魚」
 - (ii) 同一母音が連続する場合。例：/saʔa/ 「へび」
 - (iii) ある種の接頭辞、接尾辞の境界。例：/noʔita/ 「(彼は) 見る」 <no- (3人称既然法接頭辞) + ʔita 「見る」

しかしながら、速い速度の発話や打ち解けた場面での発話においては、/ʔ/ が弱化したり脱落しうるといふ。

3.2. 母音

母音音素は /a, e, i, o, u/ の5種類である。van den Berg, R. (1991:306) では、/e/, /o/ に対してそれぞれ [ɛ], [ɔ] という音価を与えている。同一母音が連続する場合は、母音間に声門音 /ʔ/ が挿入される（上記 3.1. 参照）。声門音 /ʔ/ が挿入されない同一母音の連続、すなわち長母音は、ほとんどの場合借用語に現れる。2母音の連続、3母音の連続が存在するが、これらは1音節内の二重母音、三重母音ではなく、それぞれ2音節、3音節と見なされる。例：/rua/ 「2」、/buea/ 「ワニ」など。

3.3. 音節構造

チアチア語の音節は原則的に開音節である。ただし、-mo, -mu といった接尾辞の母音が脱落し -m で現れる場合がある。例：/mbulem/ 「もどれ」 < /mbulemo/。また、이호영 (2009:98) では語末に /l/ が来るとしており、インドネシア語からの借用語においては /p, t, k/ が語末に来うるとしている。

(9) 鼻音化音は日本語の方言にも存在する。東北方言において「マド」を [ma^hdo] のように発音するが、このときの [ʰd] が前鼻音化音である。東京方言の [nd] は撥音 /N/ と破裂音 /d/ の連続した音素と認識されるのに対し、東北方言の [ʰd] は全体で1つの音素と認識される。

(10) 軟口蓋音には入破音がないので、その無声 - 有聲のペアは /k/ - /g/ である。

(11) 日本語が母音で始まる単語において、語頭に [ʔ] を伴うことに類似する。日本語の語頭に現れる [ʔ] は個別の音素として認めない場合が多いが、研究者によってはこれを1つの音素として認める場合もある。

4. ハングルによるチアチア語の表記法

ハングルによるチアチア語の表記法は、韓国に本部を置く訓民正音学会の働きかけにより作られたものである。新聞報道によれば、チアチア族は「独自の言語を持っているがこれを表記する固有文字がなく、固有語を失う危機にあった」（경향신문 2009年8月7日号）といい、これに対し訓民正音学会のメンバーがバウバウ市に対しハンゲルの使用を提案し、2009年7月にハングル普及に関する覚書を交わしたという。訓民正音学会はハングルによるチアチア語の教科書『바하사 짜아짜아』⁽¹²⁾を作成し、同年7月21日からバウバウ市内の小学生40余名に対し、この教科書を用いた授業を始めたとのことである。

이호영 (2009) における記述を基にして、訓民正音学会が作成したハングルによるチアチア語の表記法（以下「訓民正音学会式表記法」と称する）の一覧表を以下に示す。まず子音の表記である。

【表 4】 チアチア語の表記に用いられる子音字母

| | | 唇音 | 歯音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 声門音 |
|-----------|----|-------------|-------------|-------------|-------------|----------|
| 破裂音 / 破擦音 | 無声 | ㅃ bb /p/ | ㄸ dd /t/ | ㅈ jj /c/ | ㄱ gg /k/ | ㅇ '(/ʔ/) |
| | 有声 | ㅂ b /b/ | ㄷ d /d/ | ㅉ j /j/ | ㄲ g /g/ | |
| 入破音 | | ㅍ p /p/ | ㅌ t /d/ | | | |
| 鼻音 | | ㅁ m /m/ | ㄴ n /n/ | | ㅇ ' /ŋ/ | |
| 前鼻音化音 | 無声 | ㅃㅁ mbb /mp/ | ㄸㄴ ndd /nt/ | ㄸㅈ njj /nc/ | ㅇㄱ 'gg /ŋk/ | |
| | 有声 | ㅂㅁ nb /mb/ | ㄷㄴ nd /nd/ | | ㅇㄲ 'g /ŋg/ | |
| 摩擦音 | | | ㅅ s /s/ | | | ㅎ h /h/ |
| 側面音 | | | ㄹ r /l/ | | | |
| ふるえ音 | | | ㄹ r /r/ | | | |
| 半母音 | | ㅇ b' /w/ | | (ナシ) /y/ | | |

半母音 /y/ を表記する字母は用意されていないが、これは「ト a」に対して「ト ya」とするように、朝鮮語表記法と同様の方法で /y/ 音を表記することになっている。

母音の表記は以下のとおりである。

【表 5】 チアチア語の表記に用いられる母音字母

| | | | | |
|---------|----------|---------|---------|---------|
| ㅏ a /a/ | ㅓ ei /e/ | ㅣ i /i/ | ㅜ o /o/ | ㅜ u /u/ |
|---------|----------|---------|---------|---------|

表記において特記すべき事項は次のとおりである。

- (1) 語末に現れる /p, t, k/ はそれぞれ終声字「ㅂ b, ㄷ d, ㄱ g」と表記する。
- (2) 側面音 /l/ はハングル 2 字母「ㄹㄹ rr」で表記し、1 字母目の「ㄹ」は終声字として、2 字母目の「ㄹ」は初声字として表記する。例: /koila/ 꼬일라 ggo'irra 「カメ」。ただし、語末に現れる /l/ は終声字「ㄹ」1 字母のみで表記する。
- (1) 前鼻音化音はハングル 2 字母で表記し、1 字母目は終声字として、2 字母目は初声字として表記する。例: /jan̄ku/ 장꾸 ja'ggu 「ひげ」。
- (3) 音節頭に立つ軟口蓋鼻音 /ŋ/ はハングル 2 字母「ㅇㅇ''」で表記し、1 字母目の「ㅇ」は終声字

(12) 読みは「bahasa Cia-Cia」で、「チアチア語」の意。

として、2字母目の「ㅇ」は初声字として表記する。例: /toliŋa/ 폴링아 ddorri''a 「耳」。

(3) 前鼻音化音、側面音 /l/、軟口蓋鼻音 /ŋ/ が語頭に立つ場合、語頭に「으 'u」を添える。

/ndoke/ 은도께 'uundoggei 「サル」

/lima/ 을리마 'urrima 「5」

/ŋoʔo/ 응오오 'u''o'o 「鼻」

5. ハングルによるチアチア語の表記法の問題点

訓民正音学会式表記法の問題点については、이호영 (2009) において表記法制作当事者の立場から以下の2点を指摘している: (1) 語頭の /l/, /ŋ/ および前鼻音化音の表記で、不必要な「으 'u」が添加されている; (2) 語末（すなわち音節末）に現れる /p, t, k/ を「ㅃ bb, ㅌ dd, ㅈ gg」でなく「ㅈ g, ㅌ d, ㅈ g」と表記することにしている。しかしながら、訓民正音学会式表記法の問題点はこの2点のみにとどまらない。しかも、このような個別の現象面的な問題のみならず、より本質的な次元において問題をはらんでいる。

5.1. 単音文字としての問題点

ハングルは個々の字母が個々の音素を表す単音文字である。単音文字は原則的に1つの音素に対して1つの文字が整然と対応するのが、最も合理的で望ましい。実際に、朝鮮語表記のためのハングルは、朝鮮語の1つの音素が1つの字母に原則的に対応している。このように見たとき、(a) 1つのチアチア語音素が2つ以上のハングル字母によって表記されたり、(b) 逆に2つ以上の音素が同一字母によって表記されたりすることは、単音文字としては不完全な表記法であるといえる。

5.1.1. 1つのチアチア語音素が2つ以上のハングル字母によって表記される問題

이호영 (2009) で指摘した、/p, t, k/ を音節頭音では「ㅃ bb, ㅌ dd, ㅈ gg」と表記し、音節末音では「ㅈ g, ㅌ d, ㅈ g」と表記する問題は上記 (a) に属する。例えば、日本語における「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の使い分けの問題や、あるいはハングルのローマ字表記法において「ㅈ g」を「g」と「k」の2通りに表記することの紛らわしさを見ても分かるように、1つの音素が2つ以上の文字によって表記されることは、その使用において混乱を生む素地がある。また、「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」がチアチア語の表記においては元々 /b, d, g/ を表す字母として用意されたものであるため、音節末音の /p, t, k/ を「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」と表記した場合、これを /b, d, g/ と誤読する可能性があるという二重の混乱を生むおそれがある。

この問題の解決は至って簡単である。すなわち、音節頭音であれ音節末音であれ、/p, t, k/ は常に同一の字母で表せばよい。したがって、音節頭音を「ㅃ bb, ㅌ dd, ㅈ gg」と表記したならば音節末音も「ㅃ bb, ㅌ dd, ㅈ gg」と表記すればよいし、あるいは音節末音を「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」と表記したならば音節頭音も「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」と表記すべきである。

音節末音の /p, t, k/ を「ㅃ bb, ㅌ dd, ㅈ gg」と表記しなかったのは、現行の朝鮮語正書法において終声字として「ㅃ bb, ㅌ dd」を認めていないためと思われる。また、音節頭音の /p, t, k/ を「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」と表記しなかったのは、「ㅈ b, ㅌ d, ㅈ g」は /b, d, g/ に用いるのがより適当であるという判断が働いたためであると推測される。いずれの場合も、現代朝鮮語の音素と現行の朝鮮語正書法との関係に近い形でチアチア語のハングル表記を行なわんとする意図が見られる。

しかしながら、チアチア語をハングルで表記するに当たっては、チアチア語の事情のみを考慮すれば

よいのであって、そこに現代朝鮮語や朝鮮語正書法の事情を介在させる必要はまったくない。ハングルが元々朝鮮語を表記する文字であるからといって、朝鮮語に合わせる形でチアチア語の表記を考える必要などまったくないであろう。⁽¹³⁾なぜならば、ハングルのチアチア語に適用した時点で、その文字体系は朝鮮語とは無関係であるからである。

5.1.2. 2つ以上の音素が同一字母によって表記される問題

/r/ と /l/ はともに「ㄹ r」で表記する。前者は初声字「ㄹ」として、後者は終声字「ㄹ」と初声字「ㄹ」の組み合わせとして表記するので、区別はなされている。しかしながら、一般の使用を考えると、異なる音素を同一の字母で表すのは混同の余地があるといえよう。また、「ㅇ'」は /r/ と /l/ を表す字母に用いられていることも、同様の問題をはらんでいる。朝鮮語の場合、/ŋ/ は終声の位置に立つ音素であるため、終声の「ㅇ」(/ŋ/) と初声の「ㅇ」(子音なし) は相補分布しており、混同することがない。しかし、チアチア語は /r/, /l/ ともに音節頭の位置に立ちうるために、両者を同一の字母で表記するのは無理がある。

なお、/l/ は「ㄹ(終声字) + ㄹ(初声字)」、/ŋ/ は「ㅇ(終声字) + ㅇ(初声字)」のように、1つの音素を2つの字母で表記しているが、この問題については以下の 5.1.3. を参照。

5.1.3. 1つの音素を2つの字母で表記する問題

前鼻音化音は音声的には鼻音と破裂音の連続体として実現するが、チアチア語の音韻体系においてはその音声連続体が1つの音素として認識されている。したがって、前鼻音化音は1つの字母で表示されるのが望ましい。⁽¹⁴⁾ところが、訓民正音学会式表記法では音声に依拠して、例えば /mb/ は /m/ と /b/ を別個に表記して「ㄹㅁ mb」としている。/m/ も /b/ もチアチア語の音素として存在しはするが、だからといってチアチア語話者は /mb/ を /m/ と /b/ の連続と認識しているわけではないであろう。⁽¹⁵⁾したがって、前鼻音化音を「ㄹㅁ mb」のように2字母で表記することは、チアチア語の音韻体系にそぐわない表記法であるといえよう。

その問題を譲って /mb/ を「ㄹㅁ mb」とつづることを認めるとしても、「ㄹ m」を終声字、「ㅁ b」を初声字として表記する(例えば、/kombo/ ‘衣服」 「ㅁㅁ ggom-bo」など) のは問題があろう。もし音節境界が /kom-bo/ であるとするならば「ㅁㅁ ggom-bo」とような表記法も理にかなっているが、/mb/ は実際には1つの音素であるので、/kombo/ の音節境界は /kom-bo/ でなく /ko-mbo/ である。「ㅁㅁ ggom-bo」という表記法は、音素をむだに分解して表記しているのみならず、チアチア語の音節構造をも無視した非合理的な表記となっていることが分かる。

音節頭子音を終声字と初声字の2字母に分けて表記するものとしては、5.1.2. で言及した /l/ の「ㄹ r (終声字) + ㄹ r (初声字)」や /ŋ/ の「ㅇ' (終声字) + ㅇ' (初声字)」もその例である。これらもやはり、チアチア語の音韻体系の観点から見れば、極めて合理性に欠く表記法である。

これら1音素を2字母で表記するものは、音素が語頭の位置に立つ場合に、黙字の「ㅇ' u」を置くことになっている。/ndoke/ ‘サル」 は「ㅇ'도개 'uundoggei」とつづられるが「ㅇ' u」の部分チアチア語としては完全に余剰的な部分である。母音字「ㅡ u」は朝鮮語の母音 /u/ を表記するための文字である

(13) 元々ラテン語の表記に用いられていたラテン文字において、「j」はラテン語の半母音 [j] を表す文字であった。ところが、この文字は英語においては [dʒ]、フランス語においては [ʒ]、スペイン語においては [x] というように、すでにラテン語の [j] 音とはまったく異なる音を表している。

(14) 例えば、朝鮮語の歯茎・硬口蓋破擦音 [tɕ] は、音声的には [t] と [ɕ] の2音の連続であるが、音素としては1つであるため、この音をハングル表記する際にも音声に依拠して「ㄷㅈ ds」のように表記するのではなく、音素に依拠して「ㅈj」と表記する。

(15) 朝鮮語の /j/ [tɕ] が音声的に [t] と [ɕ] の連続だからといって、朝鮮語話者がこの音を /d/ と /s/ の連続と認識しないのと同様の理屈である。

が、朝鮮語のこの母音に相当するチアチア語の母音は存在せず、したがって母音字「一 u」も通常のチアチア語表記には一切用いられない。チアチア語の観点からはまったく不必要な文字「으 'u」がチアチア語表記のための不可欠な文字として用いられるわけだから、これがチアチア語話者にとっていかに不可解で混乱を呼び起こすものであるかは想像にかたくない。/lima/ '5' を「을리마 'urrima」とつづるのも同様である。この場合、/lima/ は2音節語であり、第1音節が/li/ であるわけだから、「을리마 'urrima」という表記は1文字目の「을 'ur」全体がいわば余剰的で不要な文字である。

これらの問題は、チアチア語の音素数に対して、ハングルの字母数が不足していることに起因する。この問題を解決するためには、新たな字母を創作するか、あるいは既存の字母を組み合わせた新たな合成字母を作るかといった方法を取る必要がある。

歴史的に見ると、ハングルで朝鮮語以外の言語を表記する場合、上記のいずれの方法も実際に試みられている。中国の韻書（漢字発音書）である『洪武正韻』にハングルで発音を附した『洪武正韻訓』（1455年）では、当時の朝鮮語に存在しなかった歯頭音と正歯音の違いを区別するために、歯頭音字ㅍㅌㅍㅌㅍㅌと正歯音字ㅍㅌㅍㅌㅍㅌを新たに創作した。また、日本語語彙集である『倭語類解』（18世紀初）では「なだ（灘）」を「나다 na-nda」と表記するなど、日本語の濁音を「ㄴ nd」のように鼻音字と平音字の合成字母で表している⁽¹⁶⁾。母音字母の合成においても、モンゴル語学習書である『蒙語老乞大』（1741年）で「초한 cyoohyan (cyoohyan '朝鮮')」のように、yo 音の長音を「ㅞ yoo」と「ㅞo」を縦に重ねる特異な合成字母を作り出している。このように、外国語音を表記する際には、実に多様で興味深い字母の合成が歴史的には試みられてきた。

このような前例に立ちかえれば、チアチア語の表記においても同様の試みがなされてもよいであろう。実際に /w/ の表記には合成字母「ㅃ b'」が用いられている。この字母は15世紀に存在した朝鮮語の子音 /w/（音声は [β]）を表記するために用いられた文字である。また、『訓民正音解例』（脚注(4)参照）には [l] と [r] を区別するために、前者を「ㄹ r」、後者を「ㄹ r'」と表記しようという記述がある。また、ハングル創製当初にはもっぱら /ŋ/ のみを表す字母「ㅇ ŋ」が存在した。これらに従えば、チアチア語の /l/ と /r/ や /ŋ/ は十分に1字母で無理なく表記できる。また、前鼻音化音も『倭語類解』などの日本語音の表記に倣い「ㅃ mb, ㄴ nd, ㅇ 'g」などとすれば、訓民正音学会式表記法の不都合は一気に解決する。例えば、/ndoke/ 'サル'、/ŋo'o/ '鼻' はそれぞれ「ㄴ도개 ndoggei」、「오오 ŋo'o」のように表記すれば、何ら問題ない。

それにもかかわらずこれらの表記法を採用しなかった理由として、이호영 (2009:98) では「将来チアチア族がコンピュータのキーボードを用いてハングルを入力するときや、移動通信の端末機を用いてハングルを入力するときの便宜を考慮して」現在のよう表記法にしたという。すなわち、現行の朝鮮語表記法にない字母の使用や字母の組合せでは、ハングルをコンピュータ上で処理できないというわけである。だが、/w/ の表記に「ㅃ b'」を用いている時点で、すでに訓民正音学会式表記法は通常のコンピュータ処理ができないわけだから、「コンピュータ入力を考慮して」という事からは「ㄹ r'」、「ㅇ ŋ」や「ㅃ mb, ㄴ nd, ㅇ 'g」といった表記を排除する理由になりえないであろう。

つまるところ、訓民正音学会式表記法はチアチア語の事情に合わせるのではなく、朝鮮語正書法の都合に合わせて作られているということが出来る。すなわち、朝鮮語正書法で認められているつづり字の範囲内で問題を解決しようとするがゆえに、チアチア語の音韻体系を無視した「은도개 'undoggei」や「을리마 'urrima」などの表記法とならざるを得ない。確かに、朝鮮語話者が「은도개 'undoggei」や「을리마 'urrima」などのつづりを見て発音をすれば、チアチア語の音に似た音は出るかもしれない。

(16) 中世日本語の濁音は前鼻音化音であったという説が有力である。もしそうであるとするならば、「ㄴ nd」のような表記はそのような音を示したと見ることが出来る。

だが、それとは裏腹に、このような表記法はチアチア語話者にとって極めて使いにくい表記法として仕上がっている。それはあたかも、この表記法がチアチア語の音韻体系に沿った文字体系として準備されたのではなく、朝鮮語話者がその文字を見てチアチア語に近い音が出せるように、朝鮮語を表記する文字体系のままチアチア語を表記したかのようなものである。

5.1.4. 母音字母とその音価について

チアチア語をハングルで表記する際に、文字の音価は朝鮮語を表記する場合の音価に準拠すれば理解しやすくはあるが、だからといって必ずしも朝鮮語の事情に従属する必要がないことは5.1.1.で言及したとおりである。その観点からいえば、例えば/e/の表記に「ㅐ ei」を用いなくてはならない必然性はない。

ハングルの基本母音字母は「ㅏ a, ㅑ ya, ㅓ e, ㅕ ye, ㅗ o, ㅛ yo, ㅜ u, ㅠ yu, ㅡ u, ㅣ i」の10種であり、うち単母音をあらわす字母は「ㅏ a, ㅓ e, ㅗ o, ㅜ u, ㅡ u, ㅣ i」の6種である。朝鮮語の/e/音を表記する「ㅐ ei」は、「ㅓ e」/o/と「ㅣ i」/i/を合成した合成字母である。「ㅐ ei」はハングルが作られた15世紀当時は、文字の組合せどおりに二重母音/oɪ/と発音されていた。その後、現代語に至る過程でこの二重母音/oɪ/が単母音化し/e/という音に変化したのだが、文字のつづりは15世紀のまま「ㅐ ei」を維持することになった。このようにして現代朝鮮語では「ㅐ ei」が/e/音を表しているのである。

だが、チアチア語を表記するにおいて、朝鮮語のこのような歴史的な事情は斟酌する必要がないであろう。チアチア語の単母音は5種であり、単母音を表すハングルの基本字母は6種であるのだから、この基本字母のみを用いて十分にチアチア語を表記することができる。むしろ、わざわざ合成字母を用いなくてはならない積極的な理由がない。歴史的に見ると、満洲語の/e/やモンゴル語の/e/を表記するのに「ㅓ e」を用いているが、この方式で十分に事足りる。⁽¹⁷⁾

5.2. 音節文字化する必要性

ハングルが1文字で1音節を表示していることは、朝鮮が漢字文化圏に属していることと密接な関係がある。ハングルが創製された理由は、周知のとおり、朝鮮民衆が自身の言語を自在に表記することができるようにするためであるが、ハングル創製の理由にはもう1つ大きな理由がある。それは漢字音を正確に表示するという意図である。

李氏朝鮮は儒学の一学派である朱子学を国是とした。儒学では音と政治が密接な関係を持つとされ、音を正しくあらしめることはすなわち政治を正しくあらしめることであった。15世紀の朝鮮の学者は、当時の朝鮮漢字音が隋唐時代の古い中国語音と照らし合わせて、音の様相がかなり異なっていることを認識していた。それを当時の学者は朝鮮風になまった、誤った音と解釈し、これらの誤った漢字音を正すことが、王朝の政治を正しい方向に導くものと考えた。しかして、漢字音を正しく表示する文字としてハングルが作られることになるわけである。漢字の音を表示するための文字であるから、漢字1文字に対してハングルも1文字で表示されなければならない。それゆえに、ハングルは字母を集めて1音節で1文字を形づくるようになっておりと推測することができる。

漢字文化圏におけるかかる文化的背景がなければ、字母を集めて1文字1音節の構造にする必要はないであろう。現に、近代に入るとラテン文字のようにハングル字母を横一列に並べて書く「ばらし書き(풀어쓰기 pur'essugi)」という書き方が試みられた。そのような観点に立てば、チアチア族の文化圏に

(17) なお、ハングルを手本にして作られたと見られる日本の神代文字の1つである阿比留文字では、日本語の母音/e/の表記に「ㅓ e」を用いている。

においては文字表記において漢字を意識して1文字1音節の文字構造にする必要性はまったくなく、ばらし書きの方式で表記しても何ら差し支えない。

コンピュータ入力の問題ゆえに、特殊な字母を用いず、現行の朝鮮語表記法に準拠した字母を用いるという意見があることを5.1.3.で言及したが、そのことを考慮してもばらし書きが有利である。例えば、「ㅉndo」など現代朝鮮語の表記に用いられない古文などの特殊文字は、現在のコンピュータにおける文字コード（ユニコード）に割り当てられていない。しかし、個々の字母に関していえば、「ㄹnd」や「ㄹr」といった特殊な字母もユニコードに割り当てられているので、ばらし書きにすればこれらの文字はすべてコンピュータで入力することができる。

また、かりに音節文字の構造を是としたとしても、/ndoke/を「은도께 'undoggei」、/toliŋa/を「뽕링아 ddorri'a」と表記する訓民正音学会式表記法は、現実のチアチア語の音節構造を反映しておらず、ハングルの音節文字構造としての特徴が何らまともに機能していない結果となっているので、このような表記法は何らかの形で是正する必要があるのは言うまでもない。

6. おわりに

以上のような考察から、訓民正音学会式表記法は現行の朝鮮語正書法に準拠した表記法であり、チアチア語の音韻体系に沿って作られた合理的な表記法とはいえないことが分かった。チアチア語の音韻体系を反映せず、もっぱら朝鮮語の表記法の事情に合わせているこの表記法は、言うなればハングルの読める朝鮮語話者がチアチア語の音を真似て出すことができるように作られた表記法であるともいえよう。

真にチアチア語の音素体系に依拠して、チアチア語話者の使用に堪える表記法にするのであれば、朝鮮語正書法の呪縛から外れなければならない。朝鮮語の音価とは無関係に字母を用いたり、現行の朝鮮語表記にない字母の組合せを用いたりしてもよいであろう。歴史的に見れば、ハングルは十分にそのような可能性を秘めている文字である。また、音節ごとに字母をまとめて書く音節文字の方式もチアチア語の表記には必ずしも必要なく、ラテン文字のように字母を横一列に並べて書き表してもよい。

そこまで考えが及んだ場合、「ではなぜハングルを用いる必要があるのか」という根源的な問題に立ち返ることになる。字母を横一列に書き表す方式で何ら差し支えないのであれば、アジアの一半島とその周辺でしか用いない文字をあえて採用する必要などまったくなく、世界的に汎用性のあるラテン文字によるほうが、はるかに合理的かつ効率よくこの言語を記述することができるであろう。

バウバウ市でハングルが採用されるに当たっては、言語的な事情だけではなく、政治的、経済的な事情もあったもようである⁽¹⁸⁾。また、これまでのハングル普及の人員的な実績においても、チアチア語をハングルで表記する試みは成功しているとはいえない⁽¹⁹⁾。

このように運用の実態においても非常に厳しい状況にあるといえる訓民正音学会式表記法であるが、まずもって言語学的に見ても、多くの問題を抱えているこの表記法が今後成功裏に定着しうるのかは、決して楽観できるものでないことは確かである。

(18) バウバウ市政府はインドネシア中央政府との相談なくハングル導入を決めたと東亜日報電子版は伝えている。東亜日報電子版はまた、西江大学校東亜研究所の송승원助教授の話として、ハングル導入はタミム市長の推し進める地域発展パッケージの一環であるとし、韓国との交流がバウバウ市の経済に利益をもたらさなければ、ハングルの使用継続も危ぶまれるとしている。http://news.donga.com/3/all/20110324/35830956/1 参照。

(19) 東亜日報電子版の報道では、西江大学校東亜研究所の송승원助教授の話として、これまで約200名のチアチア人の学生がハングルの習ったが、6万余名のチアチア人は依然としてハングルが読めないという。http://news.donga.com/3/all/20110324/35830956/1 参照。

主要参考文献

- 姜信沆 (1987;2007) “수정증보 훈민정음연구”, 서울 : 성균관대학교 출판부
- 文化觀光部 (1988;2007) “국어 어문 규정집”, 서울 : 大韓教科書株式會社
- 류철 (1992) “조선말력사(2)”, 평양 : 사회과학출판사
- 申昌淳 (2003;2007) “國語近代表記法の展開”, 서울 : 태학사
- 이호영 (2009) ‘찌아찌아어의 한글 서사체계’, “훈민정음학회 2009 전국 학술대회 발표논문집”, pp. 93-98, 서울 : 훈민정음학회
- 鄭寅承, 成元慶 (1973;1988) ‘東國正韻 解題’, “國寶 第一四二號 東國正韻 全六卷 (附 : 解題 · 索引)”, 서울 : 建國大學校出版部
- 崔鉉培 (1942) “한글갈”, 京城 : 正音社
- 小倉進平著、河野六郎補注 (1964) 『增訂補注朝鮮語学史』 東京 : 刀江書院
- 龜井孝 · 河野六郎 · 千野榮一編 (1992) 『言語学大辞典』 東京 : 三省堂
- 河野六郎 (1994) 『文字論』 東京 : 三省堂
- 趙義成 (2010) 『訓民正音』 東洋文庫800, 東京 : 平凡社
- 中村完 (1995) 『論文選集 訓民正音の世界』 仙台 : 創栄出版
- Anceaux, J.C. (1978). The linguistic position of South-East Sulawesi: a preliminary outline. In S.A. Wurm and L. Carrington (eds), *Second international conference on Austronesian linguistics: Proceedings. Fascicle 1. Western Austronesian* (pp. 275-283). Canberra: Australian National University.
- van den Berg, R.(1991). Preliminary notes on the Cia-Cia language (South Buton). In Harry A. Poeze and Pim Schoorl (eds.), *Excursies in Celebes* (pp. 305-324). Leiden: KITLV Uitgeverij.
- Lewis, M. P.(Ed.)(1951;2009). *Ethnologue: Languages of the World*. Dallas: SIL International.
- Sampson, G. (1985). *Writing Systems: a linguistic introduction*. Stanford: Stanford University Press.
- 경향신문 2009年 8月 7日号
- 찌아찌아족 한글 수입, 알고보니... <http://news.donga.com/3/all/20110324/35830956/1>

学 術 論 文 集 第28集

Bulletin of the Korean Scholarship Foundation

2011年11月28日 印刷

2011年12月3日 発行 (非売品)

編集・発行 財団法人 朝鮮奨学会

The Korean Scholarship Foundation

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-8-1

電話 03-3343-5757 fax 03-3344-3947

<http://www.korean-s-f.or.jp>

shougaku@korean-s-f.or.jp

制 作 有限会社 P.WORD

〒192-0073 東京都八王子市寺町 7-1-202

正 誤 表

| 頁 | 誤 | 正 |
|----|--------------|--------------|
| 24 | 0. はじめに | 1. はじめに |
| 24 | 1. ハングルの文字体系 | 2. ハングルの文字体系 |